日本現代文學全集・講談社版 92

河上徹太郎 亀井勝一郎 中村光夫 山本健吉 吉田健一 集

編集
伊藤
亀井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

日本現代文學全集
92
河上徹太郎・龜井勝一郎
中村光夫・山本健吉 集
吉田健一

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和39年6月10日 印刷
昭和39年6月19日 發行

定價 500圓

© KŌDANSHA 1964

著者
河上徹太郎
龜井勝一郎
中村光夫
山本健吉
吉田健一

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3～19
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振替東京 3930

印刷 大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷 株式會社興陽社
製本 株式會社大進堂
製函 株式會社岡山紙器所
株式會社第一紙藝社
背革 株式會社石井
表紙クロス 日本クロス工業株式會社
口繪用紙 日本加工製紙株式會社
本文用紙 本州製紙株式會社
函貼用紙 安倍川工業株式會社
見返し用紙 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

河上徹太郎　龜井勝一郎　中村光夫　山本健吉　吉田健一　集　目次

卷頭寫眞

河上徹太郎集

私の詩と眞實 抄……七
日本のアウトサイダー 抄……二四
河上肇……二四
岡倉天心……三三
内村鑑三……四六
マノン……六一
ドストエフスキーとジイド……六五
レオ・シェストフ……七三
批評の近代性に關するノート……七八

龜井勝一郎集

私の美術遍歷……八九

第一部

初旅の思ひ出……八九
法隆寺金堂の春……九二
中宮寺思惟の菩薩……九四
微笑について……九七
飛鳥路……一〇一
吉野の山……一〇六
美貌の皇后……一一三
古塔の天女……一一九

第二部

聖母マリア像……一二六
北齋漫畫……一三三
伊太利紀行……一三八
早逝の畫家たち……一四三
廢　墟……一五〇
觀音菩薩像……一五四
ヴァレリイの「ドガ論」……一六一
萬里の長城と明十三陵……一六六

中村光夫集

永井荷風……一七三
蒲團と浮雲……一八四
デュ・ガアルとジイド……一九〇
「移動」の時代……二〇八
人ごみのなかで……二一四
想像力について……二一九
トルコの話……二三八

山本健吉集

高村光太郎の生涯……二五五
日本文化を阻むもの……二六〇
詩の自覺の歴史……二六七
小說の再發見抄……二九四
『トム・ジョウンズ』の笑ひ……二九四
『自負と偏見』の微笑……三〇二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

傳奇と歴史小説……三一〇
船乗りと戰士……三一七
小説に關する愚問愚答……三二四

吉田健一集

日本について……三三七
知識人批判……三三七
二十年後の日本文學……三四六
文士稼業……三五一
チャーチルと文學……三五六
新書判が意味するもの……三六一
輕評論……三六五
英國の景色……三六九
或る田舍町の魅力……三七二
女と社交……三七五
女子大學の問題……三七九
保守黨の立場……三八三
牧野伸顯……三八七
作品解說……伊藤　整　四〇三
河上徹太郎　亀井勝一郎
中村光夫　山本健吉
吉田健一　入門……瀬沼茂樹　四〇八
年　譜……四一六
參考文獻……四四三

河上徹太郎集

ここに御かがりし
手あり

微熱庚詩人

河上徹太郎

私の詩と眞實 抄

詩人との邂逅

まだ年よりでもないがさりとて若くもない私の年頃で、青春とは一體何であらうか？　結局混濁と錯亂と衒氣に滿ちてゐて、それを豐饒と間違へてゐる所のものである。つまり天地創造の時の混沌も同じものなのだらうが、その時神樣の先づしたことは水と陸を大別することであつたやうに、青春の若々しい混沌も、これを整理する第一手段は、これに排水渠を作ることにある。つまり人は、その青春にあたつて先づ情熱を注ぐことは、激しい自己鍛錬によつて自分の感受性の形式を確定することである。そしてこの形式の獨自性の中に、初めてその人の個性とか資質とか呼ぶべきものが芽生えるのだといふ風に私は考へてゐる。だから例へばボードレールが、

私の青春は嵐吹く闇夜に過ぎない
そこここに陽の目は洩れこぼれたけれど。

と歌ふ時、これはこの詩人の陰慘な青春を限定したものであるよりは、むしろ青春といふもの自體の定義のやうに聞えるのである。人は歳と共に澄んでゆくものである。外に手はない。そして、省みて自分の青春を分析するなど、實は不可能なのである。

所で感受性といつても、その頃私は專ら外界の繪畫的なものに對して異常な魅惑を覺えたものである。そして結局そんな所から私といふ人間は育つて行つたものらしい。私は毎日日課として二三時間の散歩をした。それが私の唯一の放蕩であつた。たわいのない話だ。そして都會風景の一角の印象を得手勝手な裁ち方で切りとつては蒐集して歸つた。私が最も好きなのは、冬の晴れた夕空の下の東京の街だつた。この季節には空氣が乾いて晴れた日が幾日も續き、その暮方、すべてのビルの頂きはクリーム色に輝き、それに連る天涯は薔薇色に霞んでゐる。東京は街中も郊外も冬が一番美しい。その時刻の繁華街は、男が仕事から遊びに、女が遊びから仕事に、丁度交代する時である。然しこの場合にも私はさういふことにつき物の「情緒」といふものを、極度に輕蔑してゐた。あらゆるセンチメンタリズムを排斥することが、當時の私の自分に課した嚴しい戒律であつた。私はこの戒律によつて生きてゐた。

當時私がものを見る眼は、專ら『富永太郎詩集』一卷によつて教へられてゐた。私はこの詩人と東京一中で同級であつたが、彼は當時夭折したばかりで、遺稿集が屆けられたのであつた。しかも私は生前彼と文學づき合ひを全然してゐなかつたので、その纖細な感受性は、專らこの二三十篇の活字になつた詩業からのみ學びとつたのである。人は作品からは清潔な影響を受けることしか出來ない。私はこの幸運を今では感謝してゐる。

私は透明な秋の薄暮の中に落ちる。戰慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いてはゐない。

で始まる『秋の悲歎』と題する富永の散文詩は、彼の死の前年『山繭』といつて小林秀雄たちがやつてゐた同人雜誌に載つたものだ

が、文學書をまだ多く知らなかつた私は、この餘り鮮かな肉感と造型性を盛つた表現に接して、驚歎したのであつた。私は直ちに、かういふ實感を實習すべく、街中をぶらつき歩いた。私の感覺の色調は富永のそれよりやゝ明るいのであつたが、初冬の首都の到る所に、さういふ情感は容易に手に入れることが出來た。

富永は同じ詩の先で續ける。

私はあまりに硬い、あまりに透明な秋の空氣を憎まうか？
こゝまで行くと完全にボードレールの世界である。
秋の日の終りの何と身にしみることよ！
苦痛な程身にしみる。　（『藝術家の告白』）

といふ散文詩でボードレールが見事に捕へた「無限の感覺」といふものを、富永は自らの眼に擬してこの小品を書いたのだが、私にはボードレールの創造よりも富永の應用の方がずつと身近かに感じられ、從つてその發見が新鮮で、つまりより獨創的に見えたのであつた。

私の散歩は、盛り場だけでなく、濠端、屋敷町、店屋街、河つぶちの倉庫傍の細路など、行きあたりばつたりに繰り擴げられた。そしていつも共通してゐる條件は、決して連れがなく一人であることだつた。私はその頃全く友達を必要としなかつた。私に言葉を語るのは富永の詩集で一杯だつた。そして橋の上から運河を見降しては、

今宵あれらの水びたしの荷足は
すべて昇天せねばならぬ。　（『橋の上の自畫像』）

と暗誦したり、又、

靴穿きて木橋を踏む淋しさ！　（同上）

を實感するために、内幸町から銀座へ通じる新幸橋を渡つたりした。（この橋は半世紀たつた今日でも尚、木橋である）

丁度その頃小林秀雄は『山繭』に『一つの腦髓』といふ作品を書いた。それはむしろ蕭條たる冬の伊豆の旅を、特異な鮮かな感受性で彩つた一種の紀行文で、この種のものは、彼は後にも先にも二度と書いてゐないが、とにかく當時の私にとつては非常に感銘の深い讀物で、繰返し愛讀した。彼はその時、「一生に一度だけはこんな風に手離しで感受性の夢を織つて見るものだ」といふやうなことをいつてゐた。彼は更に感受性の冒險を求めて小笠原へ旅行したが、歸來その印象を口や筆にしたものは、私にはもはや前者の感激は見出せなかつた。確かに强烈な印象を受けたらしいのだが、それを取扱ふ覺悟の方が變つたのだらう。

私もその頃六十枚位の感覺的な散文を『山繭』へ載せた。それを最近堀辰雄が覺えてゐて、戰後ある書店へ勸めてくれたが、取出して見てわれながら餘り幼稚なので、再錄しなかつた。

然しかうやつて風景を採集してゐる私は、或ひは我々は、決して呑氣な美的鑑賞家ではない覺悟を持つてゐた。それはいつて見れば、ものを見る眼を純潔にし、感傷による歪みを排し、そして知的な、人生批評的な要素を入れた、全人的態度で臨むといつた野望であつた。つまりそれは餘りに知的に低かつた當時の文壇への反抗、それからひいては一般社會の俗物に對する嫌惡、——さういつたものに直結してゐる感情であつた。いや、そんな目的意識は抜きにしても、今にして思へば、私の青春が極端に感傷を排したといふことは、廣くいつて浪漫主義に反逆したといふことなのであつた。

この反抗は二十世紀の曙に生を享けた兒としては當然な運命であるともいへよう。この問題は獨立してまともに論じる必要のあるも

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

のだが、大體十九世紀といふ時代が、一方科學主義文明の急激な發達を背景にし乍ら、殆んど全世紀に亙つて、藝術、殊に文學と音樂とが、かくも浪漫主義運動の波に浚はれたといふことは、これは果して不可避なことだつたのであらうか？　自我の解放がロマンティシズムに結託することは分る。然しそれが文學愛好夫人のサロンの饒舌にお座敷を浚はれ、遂にヴィクトル・ユーゴーのメロドラマにまで到達せねばならぬ必然性があるのだらうか？　ベートーヴェンの人間性の高揚が、ブラームスの唯美主義はまだしも、何故マーラーやブルックナーの頽廢にまで墮ちゆかねばならないのか？　私は、全然浪漫主義のない十九世紀を想像して、却つて現實的なものを感じるのである。この文化の上の歪曲は、大げさにいへば二十世紀がその前半を捧げて錯亂のうちに挽回に努めて果し得なかつたものだといへよう。そして、まる一世紀前の先驅者ボードレールが惱み鬪つた相手の正體は、この時流のロマンティシズムなのである。（彼が一流のロマンティスト、ドラクロアやワグナーを率先して認めたのは、彼等の感性の純潔の中に反俗精神を汲んだからである。）ボードレールと、彼に少し遲れて續いた象徵主義者の間には、この反浪漫主義といふ點でのみ質的共通點がある。ランボーはこの精神を直截に、甲高い聲で歌つてゐる。

俺に食ひ氣があるならば、
先づ石くれか土くれか。
毎朝、俺が食ふものは
空氣に岩に炭に鐵。

彼の「飢」の對象は、見られる通りすべて無機物である。それは有機的なものにある人間的臭味のすべてと一應徹底的に訣別するためであつて、それ程彼は原始的狀態にある物質の實在や外貌に强烈に惹かれたのであつた。彼にとつては、人間も文明もこの種の物質であることに變りなかつた。この純潔が後年ヴェルレーヌを陶醉させ、クローデルをカトリックに改宗させたのであるが、この精神を世俗的な言葉で裝へば、同じ詩の中の次の反ブルヂョア的な散文になる。

將軍よ、君の崩れた砲壘に、古ぼけた大砲が殘つてゐるならば、乾いた土の塊をこめ、俺達を砲擊してはくれまいか。すばらしい商店の飾窓を狙ふんだ、サロンにぶち込むんだ。街にどろつ埃を食はせてやれ。蛇口なんざ皆んな錆びつかせてやれ。閨房にはどいつも燒けつく樣な紅玉の煙硝をつめ込んじまへ……

同じやうに富永太郎は、上海に遊んで、その地の頽廢と、惡と、貧と、雜沓の、世にもあくどい、怪奇な極彩色の情景を蒐集したが、その散文詩の中で彼は、美しい抒情的な臺詞を、不覺にも洩らしてゐる。

私は夢の中で或る失格をした。――私は人生の中に劇を見る情熱を急激に失つた。

だからこゝでもこの近代抒情詩人の夢は、潔癖に無機的なものの上に限られるのだ。

そして、私は花のやうに衰弱を受けた。

ランボーの色調が原色的で金屬的なのに引きかへ、富永のが暗綠色で粘液質だつたのは、偶然の體質的な相違に過ぎない。共に近代の不純の中に於ける殉教者の身分と資格のうちに、己が純潔を贖はうとした點で同じなのである。

私は子供の時から假構の稗史小説の類を好まなかつた。少年時代に『ロビンソン』も讀まず、當時流行つた黑岩涙香の『モンテクリスト』や『鐵假面』を嫌惡した。そこにある物語のエクストラヴァガンスや、感情の野卑な横溢が肌に合はなかつた。要するに私にとつて、すべてのロマンティシズムは、曖昧さ故に氣に入らなかつたのである。

この一面的な見方を押し進めると、私がその頃半ば食はず嫌ひで、既存のわが文壇文學に殆んどなじめなかつた所以も理論づけられるのである。わが近代文學が明治中葉の『文學界』運動で始められたことは定說だが、これが英文學の浪漫主義の影響の下にあつたことは、日本で初めての自我の解放といふ役割を果す上で必ずしも間違つてゐなかつた。所がこれに續いて發展した自然主義運動は、決して前の主觀主義に對する客觀主義といつたものではなく、依然として同じ自我の解放を、今度は肉體的な面からやつていつたに他ならなかつた。その意味で暴露性の中にある感情の誇張は、依然存するのである。しかもこれらの新しい文學に對し、古い方の側の硯友社文學は、これ亦完全な浪漫派文學であることは說明を要しない。して見れば明治文學は、それぞれの偶然の事情の下に、大體の主潮は浪漫主義だといへよう。それに續く大正期の理想主義も心理的傾向も、今の場合先づ論外の現象である。

かう考へて來ると、私の靑春期のわが文壇に佐藤春夫がゐなければ、私は殆んどわが既成文學に見切りをつけてゐたかも知れない。氏の『田園の憂鬱』と『都會の憂鬱』は、私が豫想する能力なく待ち望んでゐた世界への新しい啓示であつた。こゝに近代的憂愁と倦怠を胸に抱いた人間が、はつきり日本の土を踏んで生きてゐる姿が描かれてゐるのであつた。作品としては『都會』の方が遙かに立體的だ。『田園』の方は當然牧歌的で、それだけにシチュエーションに負けて感傷的なものがある。然し偶然私が今戰災を避けて住んでゐる山の中がこの作品の舞臺と丘續きなので、侘住居の感傷の上で一脈通じるものが出來たといふ餘事までである。

ともあれ私は、佐藤春夫の散文を、萩原朔太郎の詩と共に、二十世紀的自我をわが文壇的書割の下に植ゑつけた大切な記念碑だと思ふのであるが、私は大體文學的に人見知りの强い方で、すぐ樣これらの作品を日常的に身につけるには至らなかつた。それに私は今この文章で私の讀書遍歷を書かうとしてるのではなく、自分を語りたいのである。しかもそれを自分に最も身近かな存在との共感乃至反應の下に書かうとしてゐるのだ。

中原中也が私の前に現れたのは、先づそんな狀態の時であつた。年譜によると、彼が富永を知つたのは大正十三年（十六歲）、翌年小林秀雄を知り（同年富永死去）、翌々年私と紹介されたことになつてゐる。私は彼より五つ年長だつた。

彼との奇怪極まるつき合ひについては、もう多くの人の隨筆の種になつたから省かう。今見れば富永太郎が當時京都から或る友人に出した手紙に「ダダイスト（中原のこと）との dégoût に滿ちた amitié に淫して四十日を徒費した。」の文句がある。偶然殆んど同じ文句を私も曾て中原に關する思ひ出の文章の中に書いたことがあつた。それを見ると、中原の發散する作用には、實に誰に對しても同じものがあつたのだ。ただ相手の狀態が違つただけなのである。

初對面の日、彼は機嫌よく、又慇懃であつた。そして紳士の初訪問の如く、短時間で辭した。立去る時、君には今度出來た詩を見て貰ひたい、といつた。

その次に數日してやつて來た時見せてくれた詩は、確か忘れない積りだが、『地獄の天使』といふ題で、

……

家族旅行と木箱の過剩は最早、世界をして理知にて笑はしめ、
感情にて判斷せしむるなり。
——われは世界の壞滅を願ふ！　マグデブルグの半球よおゝレ

トルトよ！　汝等祝福されてあるべきなり、其の他はすべて分解しければ。
……

といつた詩であつた。（今創元社版全集第一卷一五二頁に載つてゐるこの詩の後に、推定一九二九―三〇、とある。すると年代が違ふが私の記憶はこれを覆す程確かでない。それにしても私の今いひたいことにこの詩を例にしても差障りはないつもりだ。）

私は自分自身の富永太郎に對する場合に擬して、中原中也をその三卷の全集だけ精讀して理解してゐる人があれば羨む。私も今度これを通讀して、その善意に研ぎすまされた魂の美しさに、すが〳〵しい氣持になつたのであつた。この詩にしても、「家族旅行と木箱の過剩」を一方におき、「マグデブルグの半球とレトルト」を他方におく、この對比は社會形而上學（？）的に明確で、かつ私の對社會的意識の中で割り切れないで卑屈と畏怖の感情の混淆になつてゐるものを、一擧に解決する體のものであつた。正にアヴァン・ギャルドの精神の典型である。それに比べれば現在のアヴァン・ギャルドは、やむなく政治性を帶び、表象が不純で、こんな風にスカッといかないのである。とにかく私はこれで魂の中まで見透された氣がした。それに彼の詩は、勿論一應客觀的に歌つてゐるのだが、出來るとそれを携へていつて見せる相手の人物を可なり意識してゐることは否めなかつた。つまりそれはいつも一種の魂の相聞歌なのだが、その場合相手を理解するといふよりも、彼獨得のイメーヂの動き方の中にその人物を誘導していつて暗示をかける、といつた話し掛けが含まれてゐるのである。これは現實の彼の交際術の中にもあるもので、それが正に彼の性格の魅力と嫌惡が交錯してゐる所以であり、非常に鋭く人を見拔き、又、相手に不思議な自負で阿ると共に、一方相手は飛んでもない役を振られた不愉快を與へられたりするのである。その意味で、中原は、惡意ある冷酷なリアリズムの小說家と同じやうに、モデルがなければ詩の書けない人であつた。

勿論詩のモデルは、小說と違つて、一具體的人物ではない。中原の場合、初めの頃は、身邊の友人の一心理的動機だつたり、彼の見た性格的宿命だつたりした。時には彼の敬愛する作家の文學的モティフのこともある。（例、「風が立ち、浪が騷ぎ、無限の前に腕を振る。」これはチェホフである。「朝鮮女の服の紐、秋の風にや縒れたらん。」これはヴェルレーヌである。）それから又、彼の好きな地方の風景に寄せた獨自な心象もある。といふやうな譯で、彼の詩の魅力は、丁度標題音樂を聽く時と同じで、こちらはある固定したイメーヂを見つめながら、耳に中原の個性的な、その時獨自な臺詞を聽くといふ、自由な樂しみがあつた。或ひは又丁度旅先から名勝繪葉書に添へて、氣の利いた名調子の印象を書いてくれるやうなものだといつてもいゝ。現に、山口や萩から私に寄越した葉書文は、彼の書簡集に載つてゐるが、誰が讀んでも面白いものだらうと思ふ。彼の詩はこれと同じものである。

私は中原の詩を、さういふ身勝手さでいはば愉み讀んだ。そしてそれは正當に許されることだと思ふ。のみならず、私はこの態度を、彼との私的なつき合ひにも應用した。殊にかうやつて相手に不幸な若死をされて見ると、私の身勝手は今更後めたいが、然しこれは彼に對しては友人達が皆多少何かの形でやつてゐることで、早い話がさうでもしなければ我々は身が持たないのであつた。

私にとつて富永太郎詩集の後釜となつた精神的師傅は中原との交遊だつたといふべきだと、今では思つてゐる。然し私は當時「良家の子弟」だつたからか、又は運がよかつたからか、他の友達が、小は町の人々とのいざこざから、大は警察沙汰に至るつき合ひまでしてゐたやうな交渉はなかつた。むしろ私は彼の心象を强要されるのが厭で、別々に街を歩いてゐた。中原のイメーヂは富永のより一見小說的であつた。然しそれが見事な一篇の詩に嵌め込まれるのは、彼の詩作が多く示してゐる所である。彼も亦富永と同じく、「人生

の中に劇を見る能力のない」人種である。只私にいはせれば、中原のイメーヂはより道德的なのである。それが私を悅ばせたのかも知れない。

中原の詩は實に多くのヒントをヴェルレーヌから得てゐる。例へば中原の『夏』と題する

血を吐くやうな　倦うさ、たゆたさ
今日の日も畑に陽は照り、麥に陽は照り

といふのはヴェルレーヌの

美しの徒し陽はひねもす輝きて、
丘の葡萄に注ぎ、谷間の收穫に溢る。
わが哀れなる魂よ、眼を閉ぢて內に入れ。

といふのと通じる詩想から成り立つてゐるのだが、（私は兩方の詩全體についていつてゐるのだ）仔細に見ると、ヴェルレーヌの血色に輝く落日は、寧ろ自我の外にあつてこれを侵す邪しまな被造物であるが、中原の場合は、自分の血液の中に燃えたぎる生命と同化したものなのである。こゝに中原がヴェルレーヌと似れば似る程異質的なものが發生してゐるのである。結局それは中原が「異邦人」だといふことなのだらうが、彼の場合罪の意識がヴェルレーヌ程嚴しくなく、中原にとつては神が「畏るべき」ものであるより、もつとその慈愛の方を多く感じたといふべきであらう。

私にとつてカトリシズムは、それまでもあらゆる世界觀の中で一番魅力のある、そして完璧なものとしての親近感はあつたのだが、中原を通じてその氣持は非常にはつきりして來た。中原自身どの位カトリック的であつたかは、それ自體興味のある問題であるが、彼がその少年時代を過した山口といふ土地柄や、又信者であつた祖母などの環境から、その下地は夙にあつたにしろ、要するに彼が詩人としてのヴェルレーヌの「弱さと單純さ」といふ素質に惹かれて、その改宗の一歩手前まで隨いていつたといふことで大體意を盡してゐるのである。そして私も、中原の自分自身に納得させるやうな鑑賞の仕方を通じて、ヴェルレーヌから激しい影響を受けるやうになつたのである。私は先程中原のことを「道德的」な詩人だといつたが、もつと正確には「宗教的」といふべきだと思ふ。觀念としてでなく、イメーヂそのものに宗教的なものの見方がはいつた詩人は、近代日本では中原が典型的なもの、或ひは極論すれば、嚆矢であり、唯一であるといへよう。

雨は　今宵も　昔　ながらに、
　昔　ながらの　唄を　うたつてゐる。
だらだらだら　だら　しつこい　程だ。
　と、見る　ゼル氏の　あの圖體が、
倉庫の　間の　路地を　ゆくのだ。
……
さてこの　路地を　拔けさへ　したらば、
　拔けさへ　したらと　ほのかな　のぞみだ……

全く中原にとつてヴェルレーヌの圖體は、まづ救ひのない、つまり背光を持たない聖像であつた。彼は一途にこれに縋つて、それによつていはば彼の不幸を自分の中に溫めた。そしてこの不幸が彼の詩神だつたのである。所が私にとつては、中原を通じて得たヴェルレーヌ的カトリシズムは、一つの健康な、合理的な世界觀の圖式であつた。それはボーの『ユーレカ』の如きものに倣ひ得ようか。そしてしかもその中にやはり「不幸」が拭ひ得ないで存在してゐたとすれば、それは中原のものでも、ヴェルレーヌのものでもなく、さりとて私自身のものでもなく、それは青春といふものにつきものの混

濁が齎したものなのである。私は二十五歳の頃に私を毎日襲つた焦燥を、今でも思ひ出す。あの頃の願ひは、一足飛びに二倍の年齢になることであつた。そして今日私は丁度その歳になつてゐるのである。

神への接近

現代人にとつて、神が存在するといふことをはつきり教へてくれるのは、結局無神論者か、懷疑論者か、或ひは少くとも信仰を失つてゐるものである。これは悲しいことである。私を最も神の傍まで曳いて行つたのは、何といつてもアンドレ・ジイドであらう。ジイドといふ人は、神の存在を確證してはくれないが、神の存在の氣配は、非常に魅力ある形で濃厚に感じさせてくれる人である。特に我我「異邦人」に對する說得力を以てである。

たまゝ〳〵私は今クローデルがジイドに宛てた書簡集を飜譯し終つたところだが、この巖の如き堅い信仰を持つた詩人大使と、お互の最も創作力旺盛な壯年期を親しく文通したお蔭で、ジイドの魂は明るい鏡に照したやうにクローデルの手紙に映し出されてゐるのである。クローデルはジイドが一九一四年に書いた『法王廳の拔穴』で、男色を扱つたり、法王の尊嚴を汚すやうな言葉を書いたりしたので、從來にない激しい口調で詰問の手紙を書き、それから數年間やゝ氣拙い沈默が續いたが、その後ジイドが第一次大戰中に書いた信仰の告白『爾も亦……』を讀んで、彼はすつかり機嫌を直し、一九二四年東京から次のやうに書き送つてゐる。

親愛なるジイド。あなたの『爾も亦……』を受け取つた所ですが、それは十年間途絕えてゐたあなたとの會話を再びとりあげさせてくれます。勿論その間あなたのことを考へ、あなたに對する決定的な啓示を祈るのを止めたことはありません。然しそれにしてもこの十年の間にあなたの歩いてゐる道は、私のゐるこの謙虛な大道に幾分近づいて來てゐるやうに思はれます。もしこの感動すべき小さい著書を信用するなら、今ではあなたはキリストの神性を認め、そして祈つてゐるのです。それはまるで生れたての呼吸を見てゐるのと同じやうに印象の深いものです。あなたの絕對正しい大發見は、永生は後刻に約束されたものではなく、今卽刻この瞬間から始められてゐるもので、そして神の王國は私達と共に、「我等の裡に」あるといふことです。……

これほど無條件でジイドの信仰を認めたことは、クローデルの一生のうち、後にも先にもないのである。それにはジイドが戰爭によつて惹起された魂の不安な呼聲をこの小著の中に誠實に盛つてゐるためでもあるのだが、同時にクローデルの語調の中には、このチャンスをつかまへてジイドを眞に改宗させてやりたいといふ下心があることも、正しく讀みとれるのである。だから、同じ手紙の先の方で、すぐ、いつものやうなジイドの信仰の知的なディレッタンティズムに對する不滿が口をついて出て來るのである。

然し祈りながら批評的態度を持ち、或ることを認めながら他のことを受け容れない所の、信仰の快樂主義者であることは出來ないと思はれます。

ときめつけてゐる。

この小著はジイドの信仰を知るに最もいゝテクストだが、當時我が文壇では、ジイドといへば『狹き門』と『背德者』しか出てゐなかつた時で、私は全く手探りで偶然手に入つたものから彼を讀んだのだから、彼に關する認識も後から纏まつて行つたものである。ところで私もクローデルに數年遲れて本書を讀み、當時次のやうに書いたのであつた。

眞の理智を得んがためには、理智を棄ててかゝらねばならないのである。所がジイドは、アブラハムと異つて、我が子理智の命乞ひのために、自分自身の生命も投げ出しかねない。次にこの點に關して最も個性的な一節を『爾も亦……』の中から引かう。

十月二十一日夕。
神よ、明朝は晴々しく御身に事へるために眼覺めます樣に。そして今後幸福であり續けるために必要な熱誠さの滿ちた心を以て眼覺めます樣に。
十月二十二日。
主よ、私の心から愛に關りないものを總べて取除けて下さい。我我の內に淨めて置かねばならぬのは神の像です。
主よ、御身が私の上に身を屈められてゐるからには、私の祈りはいとも純な祈りの如く、御身に返りゆくその反映に外ならぬやうに。
主よ、御身の聖寵を止め給ふな。私が祈りを止めないために。

これは理智家の典型的な祈りである。この兩日を繫ぐ一夜、ジイドの夢は必ずうなされてゐたに違ひない。この祈りの中にパスカルのいふ賭はない。或ひはあるとすれば損も得もない樣に對照表上に既に登錄された賭があるのみである。莫大な賭金を得るためには、もとをすらねばならない。然し乍らもとを失はない以上、その中に莫大な賭金の可能性はある。ジイドの知的な倨傲はこの可能性に對する自信を失はなかつた。だから我々はこの祈りの中からあらゆる理智の形態を汲みとることが出來る。かくして智が智を生かして無智を建設することも出來るのである。

私は、二十一日の夕べにすべてを神に委ねたジイドが、翌日は神の愛と自分の信とをどう轉んでも間違ひのない知性の駈引きの平衡の中に託して濟ましてゐられるのが不遜に見えた。否、正直をいへば、反對にこの不遜に魅力を感じたといつた方が當つてゐるかも知れない。つまり一般に信仰のためには極度の無智と純潔が要求されてゐるもののやうにばかり說かれてゐる時、この理智家の駈引きに滿ちた信仰の狀態は、それこそ私の如き者にとつては得難い救ひなのである。だから私はジイドを非難するやうな敬虔な論理を辿ることによつて、その隙に乘じて自分の安心立命が偸みとれる氣がしたのである。卽ち實は內心ジイドの不遜にあやかりたかつたのである。

所が一方、我ら近代の異邦人の信仰は、あらゆる偶像を排して、己れ一人の愛と怒りを强要するエホバの神を對象とせず、どうしても汎神論的になる傾きがあるやうである。前章で私は、ヴェルレーヌに惹かれた中原中也に更に惹かれることによつて、カトリシズムに關心を持つやうになつた、といつた。私は例へばヴェルレーヌが『叡智』の中で、

こゝに働かざりし我が手あり、

といつて、悔恨の血の涙を流してゐるのを見ると、單に道德的な反省だけでなく、意識の過剩から來る罪の深さも、神に謝らねばならぬ自責を感じるのだつたが、同時にこれによつて一種の懈怠の心も生じて、この言葉と共に自分の到らなさを神に預けて安心してゐられるやうな不埒な心懸けも生じるのである。そしてカトリシズムに漲る非常に健康な現實肯定の精神をそのまゝ異敎的に色鮮かな外界觀照にすりかへて、のう〳〵としてゐるといふ始末にもなるのである。例へば中原の『この小兒』といふ詩は、ヴェルレーヌのベルギー放浪時代の牧歌調を帶びた、美しいものだが、

コボルト空に往交へば、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com